

# 埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター

MAIBUN  
NIIGATA

2024 Mar

第123号

発掘  
調査遺跡  
紹介

上越市下割遺跡、南魚沼市金屋遺跡、南魚沼市六日町藤塚遺跡

埋文インフォメーション、県内の遺跡・遺物



4000年前の柱穴を掘ってみれば（上越市下割遺跡）



2023年度  
発掘調査  
遺跡の紹介 1

## 下割遺跡 縄文時代後期の竪穴建物

所在地：上越市米岡・北田中

遺跡は高田平野の中央、飯田川左岸の沖積地に立地し、現地表面の標高は約14mです。国道 253号上越三和道路事業に伴い、2002年度から断続的に発掘調査を行っており、中世、古代、飛鳥時代、古墳時代、縄文時代の遺跡が重層的に見つかりました。

11回目となる2023年度の発掘調査では、遺跡の西側と東側の2か所で調査を行いました。その結果、西側の調査区では中世の水田や古代の掘立柱建物、飛鳥時代の祭祀跡、縄文時代後期の竪穴建物などが見つかり、東側の調査区では中世の集落が見つかりました。このうち、特に注目されるのは縄文時代後期の竪穴建物です。

縄文時代の竪穴建物は、縄文時代の層を検出した時点で、炉石の一部が出てきました。炉石は建物

のほぼ中央に、円形（直径約60cm）に石を並べて設けています。石は焼けており、火を焚いて調理などを行っていたことが分かります。炉石の周りでは直径約30cm、深さ約40～45cmほどの柱穴が3基見つかり、建物の南東側では溝が見つかりました。調査を進めると、もう1基柱穴が見つかり、その外側に円形（直径約4.5m）に小さな穴（多くが直径約15cm、深さ約30cm）を巡らせていることが分かりました。この小穴に木材を立て、建物の壁を設けていたと推測しています。また建物南東側の溝は全周せず、この部分の小穴の間隔が広い点から、建物の出入口に関連するのではないかと考えています。遺物は竪穴建物の周辺に集中し、建物内や柱穴、溝から縄文土器や黒曜石のほか、耳飾や磨製石斧も出土しています。

今回見つかった縄文時代後期の竪穴建物は高田平野の低地部では初の発見で、建物の構造も明らかになった貴重な調査事例といえます。

（山崎忠良）



縄文時代後期の竪穴建物（東から）  
（炉石と柱穴、溝の完掘状況）



柱穴から出土した耳飾（北から）



縄文時代後期の竪穴建物（小穴の完掘状況）（東から）



溝から出土した磨製石斧（北西から）



2023年度  
発掘調査  
遺跡の紹介2

## 金屋遺跡 平安時代の集落

所在地：南魚沼市余川よかわ

遺跡は、魚沼丘陵東麓にある独立丘の蟻子山東側裾部に所在し、庄之又川によって形成された標高約192mの扇状地上に立地しています。古墳時代と平安時代を中心とした集落遺跡で、近年は、国道253号八箇峠道路建設に伴って発掘調査を実施しています。今年度の調査範囲では、平安時代（9世紀前半～中頃）の遺構・遺物が見つかり、当時の集落の姿がさらに明らかになりました。

遺構は、堅穴建物10棟、掘立柱建物2棟、井戸1基、土坑41基、土師器焼成遺構1基、溝・畑作溝79条、柱穴515基、性格不明遺構8基などがあります。今回はその一部を紹介します。

堅穴建物は、平面形状は方形に近いものが多く、一辺が4m前後と推定されます。地面の掘り込み後、灰白色の土を入れて床面（貼床）としたものが多くありました。カマドは南壁または西壁の隅寄りに、一部が屋外へ出る形で造られています。写真の堅穴建物は、東北地方に多く認められ

る煙道を長く造る建物です。調理場であるカマドも良く残り、構造を把握できました。魚野川流域における古代の堅穴建物の調査事例は少なく、重要な成果です。

掘立柱建物の柱穴は、一定の範囲に集中して多く見つかったことから、大型建物が存在した可能性があります。現状でコ字状に巡る溝もその範囲で見つかりました。建物に付属する溝か、区画溝なのか今後判断していきたいと思います。

左下の写真は、須恵器の甕がまとまって見つかった土坑です。その重なった状況から、破片となった後に、意図的に入れられたと考えられます。破片を取り除くと、土坑の底面の土には炭が多く混じり、また壁面が一部焼けていました。火を焚いた穴を、使用後に単純に破片を捨てた結果なのか、それとも今後も穴を使用しないために、須恵器甕を割ってから入れた儀礼的な結果なのか興味深い事例です。（石川智紀）



蟻子山と調査区の近景（南東から）



堅穴建物のカマドと煙道（東から）



土坑内の須恵器甕片の出土状況（北から）



掘立柱建物の柱穴とコ字状の溝（北東から）



2023年度  
発掘調査  
遺跡の紹介3

## 六日町藤塚遺跡

### 古墳時代中期の須恵器が出土

所在地：南魚沼市余川よかわ

六日町藤塚遺跡むいかまちふじづかは南魚沼市余川みなみうおぬまに所在する遺跡しゅうのまたです。庄之又川によって形成された扇状地に立地しており、標高は約180mです。

発掘調査は、国道17号六日町バイパスと国道253号八箇峠道路はつかとうげの建設に伴い実施しています。2017年度から2019年度まで実施した発掘調査では、古墳時代中期から後期にかけての集落と祭祀場さいしじょうが発見されています。

また2022年度の発掘調査では古墳時代後期の大規模な土器集積遺構どきしゅうせきいこうや子持ち勾玉こもまがたまが発見され注目されました。

2023年度の発掘調査では、鎌倉時代以降の畑作溝はたさく、鎌倉時代の溝と柱穴群はしらあなぐん、平安時代の溝、古墳時代後期の土器集積遺構などが発見されました。また、古墳時代後期の土器集積遺構の下位約10cmから須恵器甕すえきかめの破片がまとまって発見されました。

須恵器甕の破片はすべて同一の個体で、破片のまとまりの上位に口縁部の破片が多くみられ、正位に置かれていたものが潰れてこのような状態となった可能性が考えられます。

この須恵器の甕は残存高36.5cm、最大径43cm、底部は丸底に復元することができました。口縁には細い凸帯が2条巡り、凸帯と凸帯の間には櫛描きの波状文が見られます。胴部外面は平行叩き、底部外面は格子目叩き、内面は同心円当て具痕なを撫で消しています。須恵器が発見された層位



古墳時代後期の土器集積遺構（南から）

や、須恵器甕の製作方法や胎土・焼成の特徴から5世紀後半（古墳時代中期後半）に現在の大阪府堺市・和泉市周辺に存在した陶邑窯跡群おおさかふさかいし いずみし すえむらようせきぐんで生産されたものと考えられます。

また、この須恵器甕は口縁部が意図的に割られています。口縁の一部が欠損した後に、同じ高さに割り揃えたのでしょうか。

時代が下りますが、奈良時代の須恵器甕は水などの液体を貯蔵するだけでなく、醬・酢・酒などを醸造する容器としても使われていたとする研究があります（関根真隆1969『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館378頁）。六日町藤塚遺跡で出土した甕も何かの醸造容器として使用された可能性が考えられます。（春日真実）



須恵器甕出土状況（東から）



復元した古墳時代中期の須恵器甕  
（高さ約36.5cm、胴部最大径約43cm）



埋文  
インフォ  
メーション

## 2024年度特別講演会 「山口遺跡出土唐三彩と遣唐使」

講師 東野 治之 氏 (大阪大学名誉教授)

5月19日(日) 14:00~16:00

2024年度企画展1「キラキラ☆施釉陶磁器の世界」に合わせた特別講演会を開催します。演題にある「山口遺跡出土唐三彩」とは、阿賀野市山口遺跡の2010年度の発掘調査で出土した玩具または甕の唐三彩のことです。

唐三彩とは、中国唐代の7世紀中頃に完成したとされる彩釉陶器で、灰白色の素地に緑釉、褐釉、白釉、藍釉が単色もしくは複数かけられていることが特徴です。その種類は大きく生活用具・模型・人物形象甕・動物形象甕・玩具に分けられます。玩具はおもちゃ、もしくは観賞用の愛玩具と考えられ、笛、人形、騎馬人物、動物(馬・駱駝・猿・象など)などがあります。

山口遺跡では、弦楽器・壺を模した玩具または甕とみられる2点の唐三彩が出土しました。遣唐使節団に関係していた人物が土産として中国から持ち帰った可能性が高いとされています。写真は弦楽器を模した玩具または甕の破片で、弦を張った表現が7か所認められることから、7弦の古琴に類似します。胎土が良く、透明釉・褐釉・藍釉の3種が施された優品です。唐三彩の出土は県内で初めて、唐三彩の玩具としては国内で初めての出土でした。



阿賀野市山口遺跡出土の県内唯一の唐三彩  
(平安時代) (縦3.6cm、横2.6cm)

講師の東野治之氏は古代の対外交流について研究されてきた第一人者です。遣唐使を含め当時の時代背景などについて、広くお話しいたします。ぜひお越しください。

講師：東野治之(とうの・はるゆき)氏

1946年兵庫県西宮市生れ。大阪市立大学大学院文学研究科修士課程修了、東京大学博士(文学)。専門は日本古代史。奈良国立文化財研究所文部技官、大阪大学文学部教授、奈良大学文学部教授を経て、奈良大学・大阪大学名誉教授。東京国立博物館客員研究員、斑鳩町文化財活用センター長、武田科学振興財団杏雨書屋館長、滴翠美術館館長、日本学士院会員、文化功労者。



主要著書

『正倉院』岩波新書1988年 岩波書店

『遣唐使』岩波新書2007年 同上

『鑑真』岩波新書2009年 同上

『聖徳太子—ほんとうの姿を求めて』

岩波ジュニア新書2017年 岩波書店

『法隆寺と聖徳太子』2023年 岩波書店

## 2024年度特別講演会 「山口遺跡出土唐三彩と遣唐使」

◆ 講師：東野治之 氏 (大阪大学名誉教授)

◆ 日時：2024年5月19日(日) 14:00~16:00

◆ 定員：480名 全席自由(当日先着順)

◆ 参加費：無料

◆ 主催：新潟市

新潟県埋蔵文化財センター

◆ 会場：新潟市秋葉区文化会館ホール

〒956-0033 新潟市秋葉区新栄町4-23

駐車台数に限りがありますので、なるべく公共交通機関をご利用ください。



2023年3月24日 新潟県指定有形文化財〔考古資料〕

## 五千石遺跡出土品 670点

遺跡所在地：ながおかしてらどまりつるがそね 長岡市寺泊敦ケ皆根・つばめしごせんごく 燕市五千石（大河津分水路河川敷）

遺物保管：長岡市（長岡市埋蔵文化財収蔵センター）

県内の  
遺跡・遺物  
120

五千石遺跡は、信濃川おおこうづぶんすいろ大河津分水路左岸の河川敷に立地する縄文時代晩期（約2,500年前）から古墳時代後期（約1,500年前）にかけての集落遺跡です。遺跡は大河津かどうせき可動堰改築事業に伴い発見され、長岡市と燕市との境界に広がっていたため、2006～2008（平成18～20）年に長岡市と燕市の両教育委員会で発掘調査を行いました。

遺跡が繁栄のピークを迎える古墳時代前期（約1,700年前）の調査区からは、掘立柱建物13棟、竪穴建物7棟が見つっています。この時期の五千石ムラでは緑色凝灰岩を材料に、管玉や勾玉を作る玉作りが盛んに行われていました。その作業所として使われた竪穴建物（3区SI03）の土間から、石材を加工した時に飛び散った細かな石の破片がたくさん見つっています。土間の中央には人の頭の大きさくらいの平らな石が置かれ、この石を台にして玉作りが行われていたよう

です。また同じ頃、鉄を加工する技術を持った鍛冶職人も五千石ムラを訪れています。鍛冶職人は玉作りが行われたのと同じ竪穴建物の土間にごく簡単な炉をこしらえ、鍛冶の仕事をしました。玉作りでは石に穴を開けるために鉄針てっしんを使います。鍛冶職人はそのメンテナンスをしていたのかもしれませんが。鉄で作った道具は、当時はとても貴重で、五千石ムラの人々は尊敬のまなざしで鍛冶職人の仕事を見守ったことでしょう。

一つの竪穴建物から玉作りと鍛冶という二つの仕事をした痕跡が見つかることは大変珍しく、特に鍛冶は朝鮮半島から伝えられた最先端の技術です。北部九州、畿内を通じて当地へ、古墳時代前期の最新の文化がどのように広がり、定着していくのかを考えることのできる遺跡です。

（長岡市教育委員会 加藤由美子）



玉作りと鍛冶を行った竪穴建物（3区SI03）



玉作りの工程資料



埋文にいがた 第123号 2024年3月15日発行

発行 新潟県埋蔵文化財センター Niigata Prefecture Archaeological Research Center

指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1 TEL:(0250)25-3981 FAX:(0250)25-3986

E-mail: niigata@maibun.net URL: https://www.maibun.net/



『埋文にいがた』のバックナンバーは（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 HP でご覧いただけます。上の URL からご確認ください。